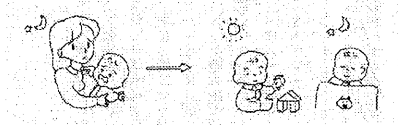
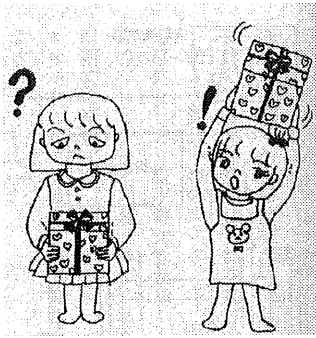


総括

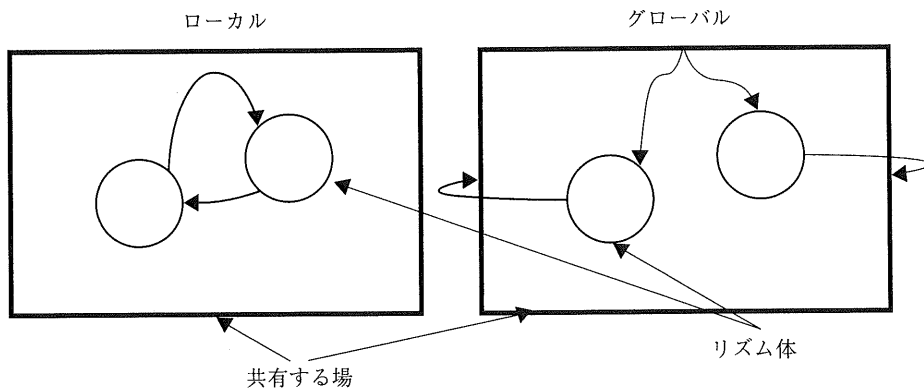
森 義仁

リズムというものは情報を増やすものと考えられている。時間軸に対する情報が付加されるのである。プレゼントをもらおうとする。あたりまえであるが、大人は中身を見なければ、その包みを開ける。しかし子供はもらった包みを開ける前に振るのではないのでしょうか。ただ持っているだけではその重さしか知りえない。しかし、それを振ることにより発生する音や重心の移動などを感覚で捉え、重さ以上の情報を時間軸情報として取得しているのである。よく考えてみると私たちがスイカを買うときに手でポンポンと叩くではないか。



私たちが多次元の情報を取得するためにリズムを利用しているように見えるのは、私たち自身がリズム体であるからと考えられる。赤ちゃんの夜鳴きは体内のリズムの周期が一定とならないのであって、日が立つにつれてその周期が、一日の周期、つまり昼と夜の交代に体内リズムが同調してくると夜鳴きがなくなるという。

さて、今回の分科会「コミュニケーションにおけるリズムの役割」では化学、文学、音楽、心理学、生物学におけるリズムに関する講演を頂いた。それらを通じた一つのまとめとして「共有する場」というものを取り上げてみたい。中国詩歌には作り手と詠み手による民族固有の心地よいリズムがある。音楽には作曲家と聴き手の間で受け渡される痕跡つまり音響は認識というレベルでは双方にとり全く同じものではなく、各々において変形をうける。そして、その音響が生き生きとしたものとなる時、双方間における人間同士コミュニケーションが生じる。会話の場面交代には、それをスムーズなものとなるためにはリズムが大切である。そのリズムの逸脱そして修復が状況依存的に起こり、全体の流れを形成してゆく。生物学では、小さな生物が集団となり大きな流れの構造を形成し、その構造は再び個々の生物の行動に影響を与えるはずである。



先の下線はリズム体を包み込む「共有する場」に相当するものを示した。共有する場にはリズム体間のコミュニケーションという点から2つが考えられる。(1)リズム体が直接コミュニケーションするローカルであり、共有する場はリズム体からの影響はない。(2)リズム体が直接コミュニケーションすることはなく共有する場を介してコミュニ

ケーションするグローバルである。このように形式的には2つを想定できるもの実際には両者が混合されるのであろう。今回の講演で特に生命体がリズム体である場合には(2)のグローバル型のコミュニケーションが強く働くものと思われ、先の下線部分をうまく説明することができる。

今回、リズム化学反応の講演では、反応槽内の溶液が直接交換されたものが紹介され、ローカル型であるが、すこし工夫を加えることによりグローバル型にすることが可能である。例えば、2つの反応槽を暖める一つのヒータの出力が、それぞれの反応槽内の化学反応の進行の状況を反映して変化するように仕組むのである。温度が変われば、反応進行の様子が変わり、進行の様子が変われば再びヒータの出力も変わるのである。つまりグローバル型である。

私たち生命体がリズム体である限り、私たちが関係する種々の場面でリズム現象が陽に陰に現われる。そのリズム体の源である生物時計の物理的仕組みは次第に明らかになってきているようであるが、これが最終ゴールではなく、その先に、「リズムが果たす役割は何か」という興味深い問題がある。今回の分科会はこの問題をコミュニケーションという視点から鳥瞰したものである。最後にリズムは必ずしも時間の問題とは限らないことを述べて総括を締めくくりたい。これは佐藤保氏の講演「中国詩歌におけるリズム」内において以下のようなことが紹介されたことから分かる。

中国詩のリズムは、独特のピッチ・アクセント（音調）をもち、単音節語である中国語（漢語）によって生み出される。中国語の媒体である漢字は、文字ごとに固有の形・音・義をあわせもつために、1字＝1音節＝1義（1単語）という関係にあつて、1句を構成する字数はすなわち音節数であり、同時にまた単語数である。5字句からなる詩を5言（5つの言葉の）詩、7字句の詩を7言詩と呼ぶゆえんはここにある。

詩のリズムは、詩句を構成する個々の音節がその基礎になっているのであるが、詩を作るとき（あるいは詩を吟詠するとき）には、1句の連続する音節群にある種の段落を入れて詩句を作る（詠む）のが普通である。例えば、五言の詩句は「2字＋3字」、七言のそれは「4字＋（2字＋2字）＋3字」で構成される。

春眠＋不覚暁

千里・鶯啼＋緑映紅

この段落が中国詩独特のリズムと深く関連するのである。